

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：32683

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720169

研究課題名(和文)シュルレアリスムにおける同時代の科学的言説の受容の問題

研究課題名(英文)Literature and Science. Surrealism, technologie and epistemology

研究代表者

齊藤 哲也(SAITO, Tetsuya)

明治学院大学・文学部・准教授

研究者番号：10507619

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：1920年代から1930年代のフランスにおいて、たとえばアインシュタインの相対性理論やハイゼンベルクの不確定性原理などは、自然科学を専門領域とする研究者のみならず、一部の前衛芸術家たちのあいだで盛んな議論の対象となっていた。本研究で考察の中心としたのは、1920年代にフランスで活動を開始したシュルレアリスムの作家や芸術家における、これらの科学的言説の受容である。本研究は、作家や芸術家たちが、従来の区分においては「文学」や「美術」の対象外にあるとされてきた特殊な言説や図像を、いかなる仕方でも自らの作品のなかに移入し作りかえていったのか、このような創造行為の過程を具体的な例とともに検討していった。

研究成果の概要(英文)：In France from the 1920s through the 1930s, the discovery of the theory of relativity of Albert Einstein or the quantum mechanics of Werner Heisenberg became a target of a prosperous argument among some avant-garde artists. This study examined the reception of these "scientific discourse" in writers and artists of the Surrealism. We examined the process of the creation act of the literature and art with concrete examples.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：シュルレアリスム 認識論 アンドレ・ブルトン ヴォルフガング・パーレン 文学と科学 フランス文学

1. 研究開始当初の背景

シュルレアリスムは、アンドレ・ブルトンの『シュルレアリスム宣言』(1924)に端を発し、フランスを中心に世界規模で展開された20世紀の文学運動である。この運動の最大の魅力であり、また研究上の難しさとしてしばしば指摘されてきたのは、その活動が、文学のみならず、美術や哲学や政治など、きわめて多領域に広がっていることである。

本研究の代表者は、平成20年度から平成21年度のあいだに交付された科学研究費補助金において、文学の問題が、映像の問題と交差する複合的領域に焦点をあわせて、シュルレアリスムについての研究調査をおこなった。この研究をつうじて明らかとなったのは、たとえば「目に見えないもの」を作品として表現するという、一見「前近代的」ともみえかねないスローガンひとつとっても、それは、時空間についての従来の概念の大幅な変更を迫る、同時代の科学的発見と密接な関係をもっていたということである。

20世紀に誕生した文学や美術の運動が、同時代の科学的発見と浅からぬ関係を有していたことは、これまでもたしかに指摘されてきた。たとえば、シュルレアリスムに先行する、キュビズムや未来派と呼ばれる運動については、相対性理論をはじめとする科学的言説の受容といった問題が、文学や美術研究においてさかんに議論されてきた。その一方で、おなじく20世紀生まれの運動であるシュルレアリスムについては、このようなアプローチはこれまでほとんどとられてこなかった。

理性を批判し、想像力、夢、無意識を称揚する、現実逃避的運動というきわめて一面的な評価が、このような問題系を

いままで覆い隠してきたのである。

このような研究状況に鑑みて、本研究は、シュルレアリスムにおける科学的言説の受容 というテーマを設定することで、これまでの文学研究で積極的に論じられてこなかった領域を明らかにすることを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、20世紀の文学運動シュルレアリスムにおいて、同時代の科学的言説がいかにかに受容されたかを考察することを目的とした。そこで大きなポイントとなったのは、つぎの2点であった：

1) 科学的著作にみられる用語や図像が、作家や芸術家の作品に移入され使用される過程を、テキストや作品にそくして具体的に調査分析すること。

2) それをつうじて、文学が歴史的に形成される様態の一端を明らかにすること。

以上2点の研究目的を達成するために、おもに以下の問題を立て、研究範囲をあらかじめ限定した。

(A) 言説としての科学

1920年代から1930年代のフランスにおいて、たとえばアルベルト・アインシュタインの相対性理論や、ルイ・ド・ブロイの量子力学における発見、ヴェルナー・ハイゼンベルクの不確定性原理などは、自然科学を専門領域とする研究者のみならず、一部の前衛芸術家たちのあいだで盛んな議論の対象となっていた。本研究で考察の中心となったのは、シュルレアリスムの作家や芸術家における、これらの科学的言説の受容の様態である。

検討されたのは、あくまで、「これらの言説(テキスト)がいかにかに受け取られたか」という具体的な問題であり(「受

容の様態」)、本研究の目的はかならずしも、自然科学の立場からその(理論的)正当性を評価することではない。

(B) 調査の対象

つまり本研究は、シュルレアリスムの作家や芸術家たちが、従来の区分においては「文学」や「美術」の対象外にあるとされてきた 特殊な言説や図像(たとえば「ダイヤグラム」など)を、いかなる仕方で自らの言説や作品のなかに移入し、また、それをいかなる仕方で文学や美術固有の問題として創りかえていったのか、このような文学・美術の創造行為の過程を具体的な考察の対象として設定した。また、文献調査の対象には、当時フランスで流通していた啓蒙書や科学雑誌といったテキスト群も含まれる。このように調査の対象を設定することで、「間違い」や「誤読」といった見方とは異なる地平に、芸術家たちによる科学的言説受容の問題を位置づけていくことを目指した。

(C) 文学の歴史形成の問題

本研究がシュルレアリスムという個別事例をつうじて明らかにしたかったのは、一般的な区分では異なる領域に属するとされるテキストや図像が、文学や美術の領域に引用され使用される、その具体的な様態でありプロセスである。つまりこの研究で解明が目指されたのは、文学の歴史形成 にかかわる問題であって、文学の(科学的観点からの)正当化ではない。むしろ本研究の立場は、作家や芸術家による同時代の科学的言説の創造的な「誤読」こそを重視するものであった。

3. 研究の方法

上記の目的に鑑みて、本研究は、文献資料の調査分析を中心に進められた。

一口に「シュルレアリスム」といっ

ても、これに参加した作家や芸術家は数十人にもものぼる。議論が拡散的なものになることを回避するため、三年間の期間内で扱う対象を、あらかじめ以下のテーマならびに作家・芸術家に絞り込んでおいた:

- 1) 文学理論の形成と科学的思考 ヴォルフガング・パーレンを中心に
- 2) 科学的用語・図像の文学的・美術的使用法 1930年代後半のシュルレアリスム、おもにロベルト・マッタを中心に
- 3) 文学と技術の交差するところ アンドレ・ブルトンと写真

本研究は対象としてこれらのテーマならびに作家を設定し、それを文献資料の調査を中心に進めていった。文献資料については可能なかぎり国内において収集調査する努力をしたことは言うまでもないが、1920~30年代にフランスで出版されていた雑誌のなかには、再刊されていないものも少なくなく、調査のために、研究期間中、二度、海外に研究調査に赴き、専門図書館を利用して研究を進めていった。具体的には、平成24年度と平成25年度にそれぞれ一回ずつ、パリのフランス国立図書館と、おなじくパリのポンピドゥー現代美術センター内の図書館での資料調査を実施した。調査実施のまえに対象を十分絞りこんでおくことで、それぞれ十日間程度のコンパクトな日程で作業を終えることができた。

4. 研究成果

以上の作業をつうじて、本研究がこれからの文学研究に提起しえた問題は、おもにつぎの2点であると考える。

(1) 文学史の再構築へ向けた準備

シュルレアリスムは、合理的思考が抑圧してきた想像力、夢、無意識、狂気な

どに積極的な価値を賦与した運動であることはたしかであり、またその点に、この運動の文学史的・美術史的なインパクトがあったことも事実である。しかしそれが、19世紀的＝ロマン主義的な「退行」というきわめて一面的な評価をこれまで生んできたことも否めない。ただしこのような評価にたいして、たとえば政治運動に特化した(いわば「現実主義的」な)シュルレアリスム像を描くことも、また違った意味において文学や美術に提起された問題を隠蔽することに繋がりがねない。

20世紀になされたいくつかの科学的発見は、自然科学の研究室を飛び出して、世界にたいする人間の認識を大きく変える結果となった。同時代の科学にたいするシュルレアリスムの反応を具体的な資料調査で跡付けることで、本研究は、シュルレアリスムという枠をこえて、従来の文学史的整理の再編成を、具体的な視点から提案できたのではないかと考える。

(2) 周辺領域と議論を共有できる新たな基盤づくりに向けた準備

言うまでもなく、科学や技術をめぐる問題は、現在、哲学や人類学、メディア学や映像学など、人文・社会科学の複数の領域において盛んな議論がなされている。シュルレアリスムを具体的な事例として、文学と科学との関係を扱った本研究は、これから、文学にとどまらず、周辺の研究分野とも議論ができる共通の基盤づくりに貢献できたのではないかと考える。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)
齊藤哲也「アンチシュルレアリスム」『思想』

1062号、2012、60 83、査読なし

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計3件)
齊藤哲也『零度のシュルレアリスム』水声社、2011年、271

齊藤哲也『ヴォルフガング・パーレン 幻視する横断者』水声社、2012年、276

林道郎、森本庸介、塚本昌則、坂本浩也、内藤真奈、野崎欽、港千尋、鈴木雅雄、齊藤哲也、星埜守之、永井敦子、倉石信乃、桑田公平、昼間賢、佐々木悠介、澤田直、滝沢明子、管啓次郎、坂本さやか『写真と文学 何がイメージの価値を決めるのか』平凡社、2013年、377(147-164)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者
齊藤 哲也 (SAITO, Tetsuya)
明治学院大学・文学部・准教授
研究者番号：10507619

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：